

見えないやさしさ

〈東京都〉とみやま たけし 遠山 健 43歳

幼いころから、病院で行われる出来事が怖くて大の病院嫌いの私。

その上、極度の怖がりで血を見ることはおろか、点滴や採血の針が皮膚に刺さっている状態を見るだけで気分がスーッと遠のいてしまう「迷走神経反射」が起きてしまうほど、医療行為がとにかく不安で怖いのです。

そんな私が手術のために入院するなんて！まさに想像を絶する事態であり、毎日落ち込むばかり。

K病院では「入院オリエンテーション」といって、病棟看護師が入院に伴う事前説明を目的とした面談をする仕組みがありました。

オリエン当日。多忙な病棟看護師にとっては、点滴や採血などは日

常の業務のせいか、きつと私の不安などは瑣末な訴えだったのでしようか。思いがけずさりと形式的な面談をして終わったように感じました。

その面談から1カ月後、私は入院し手術の日を迎えました。

術後の処置が終わり、たくさんの管につながれた自分の姿を確認しました。鼻の管、背骨に入った硬膜外麻酔、ドレーン、尿の管、そして左手にはなぜか包帯が巻かれていました。

なぜ？ と思い、翌日、担当になった看護師に左手の包帯の理由を聞いてみました。すると、包帯は「点滴針の刺入部が見えないように巻いておきましたよ」との返事。

1カ月前の面談時、私の小さな訴えが「あのときの」看護師にちゃんと届いていたのだと、記憶の糸がつながったのです。面談をした看護師から担当看護師への申し送りリレーで、不安の大きな私に対処するために点滴針が刺さっている場所を見えなくする方法(包帯)を考えてくれていたようなのです。

1本の包帯による見えない「やさしさ」。

病気治療はたしかにつらいものですが、今回入院したことで看護師さんから多くの優しさを感じました。同時に仕事の大変さも知りました。そう思った時、あれほど怖かった医療行為を乗り越える力が湧いてきました。